大釈迦本宗　能忍寺

能忍寺たより

Vol.37

行事紹介

○成道会（じょうどうえ）

成道とはお釈迦様が悟りを開いたことを表し、このことを記念して十二月八日に法会が行われます。お釈迦様は二十九歳で出家し、苦行を経て悟りを得られました。お釈迦様が悟りを開き成道を得たことで多くの人を導き救うことができたのです。そのため、成道会はお釈迦様への感謝をささげる日です。成道会は灌仏会や涅槃会と並ぶ釈尊三大法要の一つとされています。成道会は宗派を問わず広く行われており、お釈迦様の教えを改めて認識し、自己を見つめ直す場となっています。成道会は仏教徒以外でも参加可能な寺もあるため、一般での参加も増えているようです。成道会では寺院でさまざまな行事が行われます。法要や講話、坐禅や瞑想体験など宗派や地域によってさまざまです。成道会は重要な仏教行事のひとつです。ご自身の近くの寺院でどんな行事が行われているか調べてみると新しい発見があるかもしれませんね。

今月のことば

～聞いて極楽見て地獄～

人からの話で聞いた内容と実際にみたのでは差が激しいこと。皆様も一度は経験があるのではないでしょうか。聞くとみるのとは大違いで、たいていの場合は耳にしていた話よりも実際に目にしたときの方が多いかと思います。このことわざは、衣食住に困らない極楽の場所があると聞いたが、実際に行ってみると廓で地獄のような生活だったという内容から転じて来ているとされています。人づてに話を聞くよりも、実際に自分の目で見てみるのが一番正確で信用できますね。

コラム　あれもこれも仏教用語

○ないしょ(内緒)

「表向きにせず、内々にすること」「秘密、内密」という意味で使われる「内緒」という言葉ですが、こちらの語源は仏教用語からといわれています。もともとは「内証」として使われていたのが転じて「内緒」になりました。内証とは「自分の心の中で悟ること」また「その悟りそのもの」を表します。本来の内証とは如来、仏の悟りの境涯（人がこの世に生きてゆく上での立場。境遇。身の上）を意味するので、心のうちの悟りを「自内証」ともいいます。これに対して、外に現れた利他のはたらきを「外用（げゆう）」といいます。これらを合わせて「内証外用（ないしょうげゆう）」と総称し、密教を中心に用いられてます。人間が思慮分別して推測できないことを強調して使われる言葉、つまり仏意のことだった言葉が、「他者が窺い知れない内面の世界」という意味から「表向きでない」「内密の」という意味で使用されるようになり、「人には言えない内密の」という意味が現代に残り、発音も「ないしょう」から「ないしょ」へ変化していきました。

はじめての仏教

○諸法無我

「諸法無我」とは諸行無常と並んで仏教の真理とされる教えです。「すべてのものごと（諸法）には、固定的な実体（我）は存在しない」とし、あらゆるものごとは互いに依存し合っており、ただそれだけで存在しているものはひとつもないという意味で語られます。

仏教ではあらゆる存在を五蘊という要素の集まりとして分析します。「色（目に見える形あるもの）」「受（五感で触れたときの感じ方）」「想（知識やイメージから把握する）」「行（○○したいという思いから行動につながる）」「識（対象を分析・認識する）」の要素をはじめとするすべての構成要素や現象を包括する言葉が「諸法」となります。この五蘊が一時的に集まって相互に依存し合いながら成り立っている「現象」である「私、自分」という存在は一瞬たりとも同じ状態ではなく、刻一刻と変化を続けており、「変わらない私」といえるような固定的な実体（我）はどこにも見出せるものではないと仏教では語られます。

この考えにより、自己中心的な考えや他者との比較、失うことへの恐れなど「私」を不変と考えるからこその「我執」から生じる苦を打ち破り、また自他の区別とは絶対ではなく、互いに影響し合いながら存在していると考え、他者への慈悲の心が芽生えてくるとされてきました。

「我」へのこだわりを失くした「無我」の境地は大乗仏教では「空」という言葉で説かれます。